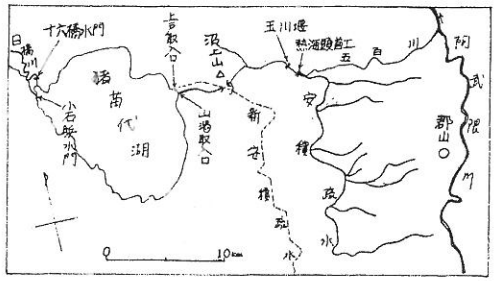
安積疏水
――日本最初の国営灌漑事業――

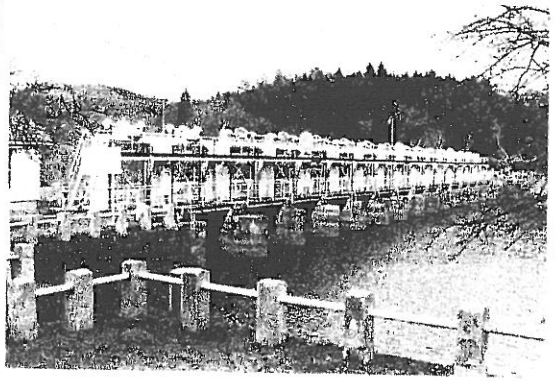
安積疏水は、猪苗代湖の水を引いて郡山盆地西部を灌漑するため、明治一五（一八八二）年に完成した農業用水である。

阿武隈川中流の西岸には、広大な未開の原野、安積野があった。明治六年、その一角の大槻原（現郡山市）に、士族による最初の小規模な開墾が始まり、ついで郡山の商人が出資した開成社の開墾事業も行われた。士族授産と殖産興業のため、東北地方の開拓適地を探していた政府は、先行していたこれらの事業と安積野の地理的条件に注目、この原野の大規模開拓と猪苗代湖からの疏水開削を、直轄事業として取り上げた。

疏水の測量・路線選定・設計は、内務省勧農局から派遣された南一郎平らと地元技術者によって進められた。明治一一年秋に現地を視察した内務省長工師ファン・ドールンがこれを承認、翌一二年、勧農局の技師山田寅吉が詳細計画を作成、同年一〇月に着工した。

疏水の路線は、猪苗代湖（湖面海抜五一四メートル）東岸の山潟から取水し、沼上山を掘り抜いて五百川にいったん落す。これを熱海付近で再び取り入れ、盆地西縁に沿って幹線水路を南下させ、これより七本の分水路を東へ流下して支線を分ける。工事の重点の一つは、猪苗代湖西北隅の戸ノ口における十六橋水門の建設で、日橋川（阿賀野川上流）沿岸の水霊要を損なわないよう、水位調節の配慮が行われた。最も難工事であったのは、山潟取入口から田子沼を経て山麓に至る開水路（三、九〇〇メートル）と、沼上隧道（五九一メートル）の開削であった。隧道工事では、工期を短縮するため、地表から作業坑（斜坑・立坑）を掘り込み、坑道の分割掘進を行った。総延長一三〇キロメートル（幹線五二キロメートル、支線七八キロメートル）に及ぶ安積疏水の工事は三年で完成し、明治一五年一〇月一日に通水式が行われた。





◀大正三年に改築された十六橋水門
当初は石造アーチ式であった。

安積開拓地には、久留米など各地から旧士族（約五〇〇家族）が入植した。疏水の灌漑面積は当初約三、〇〇〇町歩（三、〇〇〇ヘクタール）、その後の分水拡張にともなって八、〇〇〇町歩に達した。安積疏水の開発効果は農業だけにとどまらず、上水道・工業用水・発電にも生かされ、郡山地方の発展の基礎となった。安積疏水は、県営農業水利事業（昭和一九年完成）、新安積疏水建設（同三七年）、国営農業水利事業（同五七年）などの改修・拡張工事を経て、現在の灌漑面積は約九、三〇〇ヘクタールに及んでいる。

安積疏水の施設は、たび重なる改修の結果、当初の姿を伝えるものはほとんどない。猪苗代湖の西岸から主な施設を見れば、大正三年に改築された十六橋水門、昭和一八年、電力会社との協定で実施された湖面低下工事のため生まれた小石浜水門、東岸には昭和三七年に完成した上戸の新取入口がある。近くの山潟には最初の取入口はないが、湖面低下で昭和一八年から三七年まで稼働した揚水ポンプ場が、レストランとして保存・再利用されている。現在の安積疏水は、上戸取入口からすぐトンネルに入っているが、沼上山麓の旧隧道入口には制水門の一部が残っている。五百川の谷に下ると、熱海の町に入る手前に玉川堰がある。昭和四八年に下流の熱海頭首工ができるまでは、安積疏水はここから取水していた。現施設は昭和三年の改修。熱海頭首工の下流で五百川を横断する安積疏水橋は、かつては石造めがね橋として名物だったが、今は鉄管橋である。幹支線水路は、すべてコンクリートで改修されている。

（飯塚一雄・いいつかかずお）

【関連産業遺跡】　開成舎（郡山市開成三丁目。明治七年に開拓事務所兼区会所として建てられた擬洋風建築。福島県重要文化財。現在は民俗資料館になっている。

■参考文献　1『安積疏水志』安積疏水水利組合、一九〇五年、2『安積疏水百年史』安積疏水土地改良区、一九八二年、3『安積開拓と安積疏水総合調査報告』福島県教育委員会、一九八六年。